佐山　航平さん（川添）

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム　村田・赤間
取材日：６月26日

町の復興の話を聞くと自分の士気も上がる。若い人が戻って来られる環境にしてほしい

▲将来の夢の実現に向けて意気込む佐山さん

宮城県石巻市にある日本製紙株式会社石巻工場で働きながら、硬式野球部に所属されている佐山さん。身長190センチメートルの長身を生かし、一塁手として活躍中です。

現在、一人暮らしをされている石巻市内でお話を伺いました。

◆震災時は中学校2年生。家族ばらばらに避難

震災の日は通っていた中学校の卒業式で、地震が起きた時には友人の家にいました。学校で地震の体験をしたことがあったのですが、それと同じ大きな揺れでした。自宅に戻ったところ、停電はしていなかったので、すぐにテレビを見たんですが、最初は何が起きたのか分かりませんでした。

当時、父は高齢者のグループホームを経営していました。入居者とともに津島地区に数日滞在し、その後、福島市へ移動しました。母は障がい者の施設に勤めており、利用者の方と一緒に西郷村に避難しました。私と当時双葉高等学校の1年生だった兄は、白河市の親戚の家に避難し2週間お世話になりました。

兄がいわき市の高校に編入することになったので、父と3人で白河市からいわき市の借家に移りました。母が西郷村に残っていた間は、父が自分たちの世話をしてくれました。

現在は、いわき市に自宅を建てて、両親と兄が住んでいます。グループホームは本宮市で再建したので、父は毎日、いわき市から本宮市へ通っています。

◆日本製紙株式会社石巻工場で働きながら野球に打ち込む毎日

野球は小学校1年生からしていました。少年野球チームで週に3日（月・水・金曜日）の練習がありました。今泉さん（第67号・平成29年1月号掲載）や今泉さんのお兄さんとも同じチームで、家族ぐるみの付き合いでした。

いわき市の湯本高等学校に進学し、野球部で活動していた時に、今の職場である日本製紙株式会社からスカウトされました。高校を卒業した平成27年4月に入社し、石巻工場に配属、硬式野球部に入りました。普段は、午前は経理の仕事、午後は野球の練習という1日です。シーズン中は一日中練習ということもあります。

▲明治神宮野球場でホームラン

8月下旬からは、遠征試合が始まります。両親もよく試合を見に来てくれます。夢はプロ野球選手。やれるところまで一生懸命やりたいです。

◆浪江の頃の友人との交流は続いています

石巻市には浪江の知り合いはいないです。石巻市に来た頃は、親元を離れるのは初めてだったので少しホームシックにかかったこともありましたが、今は大丈夫。生活にも不便はありません。

浪江の友人とは高校時代には会えませんでしたが、社会人になってからは結構会って昔の話をしています。二本松市であった成人式では、たくさんの同級生に会うことができました。また、試合の遠征先で、友人と会ったりもしています。

浪江の自宅は解体され、更地になっています。浪江に行くのはお墓参りくらいですかね。高校の先輩が町役場にいるので、町の様子は聞いています。復興の話を聞くと自分の士気も上がります。若い人が戻って来られる環境にしてほしいと思います。

浪江のこころ通信

● 第100号 ●

平成23年３月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年３月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト” は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信（※1）」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム（※2）が中心となり、全国各地のＮＰＯ、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※１ 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話しした「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※２ 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、ＮＰＯ、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第100号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979－1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7番地2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX 0240（34）4593